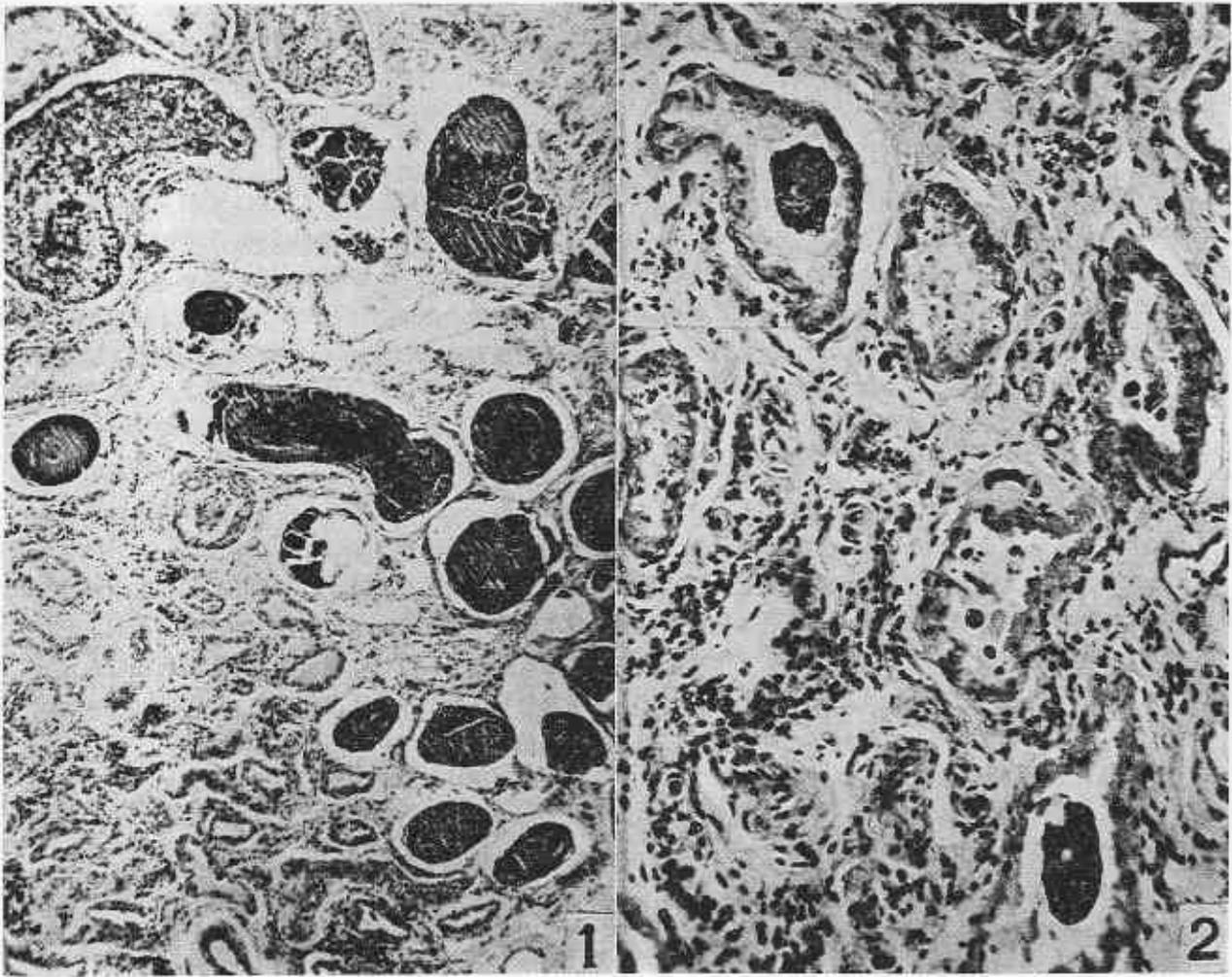


日 生 研 究

第 8 卷 昭 和 37 年 10 月 第 10 号



種 雄 牛 辜 丸 の 石 灰 沈 着

家畜衛生試験場北陸支場出題 第1回獣医病理学研修会標本 No.7 (a, b)

褐毛和種 9才 辜丸は左右とも萎縮性で、剖面は線維に富み、白膜下および実質内には、黄白色顆粒状の、限界明瞭なる、小豆大ないし蚕豆大の不正形硬固なる病巣が左右ともそれぞれ数個あて散在している。病変部を生化学的に検査したところ、Ca⁺、IP⁺、Mg⁺であつた。

1) は肥厚せる白膜直下の病巣の所見である。精細管上皮細胞は萎縮、消失し、正常なる精子形成は見られず、内腔には顆粒状、または一様にエオジンに濃染せる塊状物(石灰反応⁺)が充満し、その中に変性、死滅せる精子凝集塊を含有するものが多い。これらの石灰塊を充満せる精細管の表面は、きわめて薄い弾性線維性被膜(基底膜)により覆われ、精細管を圍繞せる間質結合線維との間には比較的広い空隙を形成している。H.-E. ×5002)は上記の病巣に隣接せる部位の所見で、精細管壁

はエオジンに均一に好染せる細胞質を有する、1~2層の細胞層より成つている。これら細胞の多くは紡錘形または小円形の濃縮核を有しているが、核消失に陥つているものもあるし、また一部にはほぼ正常の構造を示す支持細胞や精母細胞も認められる。またこれらの部位には、やや配列の不規則な弾性線維がよく発達している。精細管の内腔はやや狭小となり、その中に崩壊核、変性精子、微細顆粒状ないし小塊状の石灰などを入れている。間質結合線維はよく発達し、小動脈の増生、間質細胞の限局性増殖が認められる。H.-E. ×170

近時種雄牛の精液性状の不良および受胎率低下などの理由で廃用となつたものの中に、このような病変を有するものがしばしば認められるようである。原因は不明であるが、環境の急変、濃厚飼料の過給、運動不足、ホルモンの不均衡などが一応考慮されよう。